

## 肖像と伝説

―市橋鐸・林輝夫師弟の内藤丈艸像蒐集から

高木 史人

一、「視覚的のもの」への時代

ここに一冊の写真帖がある。

黄の布地表紙に『愛知県史蹟名勝天然紀念物』と題簽が張られたB5判横長のアルバムである。奥付には「昭和二年十一月十三日発行」の「非売品」とあり、その次の行には「愛知県史蹟名勝天然紀念物調査会」と記されている。これが著者ということなのだろう。表紙を捲ると、「序」が二つ付いている。最初の「序」には「史蹟名勝天然紀念物保存ノ必要切ナルノ秋ニ方リ茲ニ本帖ノ成ルニ会フ就テ闊スルニ県内各地ノ資料ヲ悉ク網羅シタリト謂フヲ得ザルモ概ネ其精粹ヲ収メタリ。／世人之ニ依テ本県郷土ノ由来ト特長トヲ諒得シ以テ文化ノ進展ヲ図リ我國体精華ノ顕彰ニ寄与スルアラバ本事業ハ徒事ニアラザルベシト云爾。」と記されている。全文を掲げた。筆者は「愛知県知事／小幡豊治」。「郷土」の由来と特長とを諒解会得することが日本の「國体精華」の顕彰に寄与することに繋がるという。こ

れが当時の行政の長としての郷土を諒得することすなわち郷土研究への公式の見解だったのだろう。さて、二つめの「序」は「愛知県史蹟名勝天然紀念物調査会長／愛知県学務部長書記官／中村忠充」の筆になる。これは知事の「序」を詳述したものである。愛知県には史蹟名勝天然紀念物の「一大宝庫」であることを述べた上で、「然シテ近時動モスレバ物質文明ヲ探ルニ急ニシテ此等重要ナル史蹟名勝天然紀念物ヲ顧ルノ遑ナク、日ニ湮滅破壊ノ運命ニ至ラシメ惹イテハ國民思想ニ影響ヲ招来セム」とするのを憂えるという。物質文明すなわち近代文明の押し寄せる中でかつての日本らしさ（史蹟名勝天然紀念物）が失われることが「國民思想」に悪影響を与えるのを憂えているのである。「史蹟」は「祖先ノ尊キ経験ノ結晶」を今に伝える具体物であり、「名勝天然紀念物タル郷土ノ山川風物」は「祖先ノ精神生活ノ対照物トシテ」日々仰ぎ見る伴侶だったという。そうして、それらが失われることへの対策として「我國粹ノ發揮ト文運ノ進展」のために「本会ハ史蹟名勝天然紀念物展覽会ヲ開催シ茲ニ又本

帖ヲ上梓シテ世人ニ紹介スル」というのである(右の二つの「序」の日付は、どちらも「昭和二年九月三十日」)。「序」に続く「例言」には「一、本写真帖ハ昭和二年五月名古屋市内松阪屋ニ於テ愛知県史蹟名勝天然紀念物展覧会開催ノ際出品セシ史蹟ノ部一千九百九十八点、名勝ノ部六十点、天然紀念物ノ部百七十二点ノ内ヨリ選択掲載セシモノナリ。」などとある。続いて「目次」をみると「第一、史蹟」には五三の項目が、「第二、名勝」には八の項目が、「第三、天然紀念物」には二一の項目が並んで、それぞれに写真が紹介されている。

当時、「史蹟名勝天然紀念物」を言挙げするには、法的な裏付けが存した。大正八(一九一九)年四月公布の「史蹟名勝天然紀念物保存法」、同五月公布の「史蹟名勝天然紀念物調査会官制」、同二月公布の「史蹟名勝天然紀念物保存法施行規則」、大正九年一月の「史蹟名勝天然紀念物保存要目」などがそれぞれある。「史蹟名勝天然紀念物保存法」によると、史蹟名勝天然紀念物の指定は内務大臣(あるいは地方長官)が行なうことになっている。文部大臣の管轄ではなかった。しかして、これらの史蹟・名勝・天然紀念物は、学校教育での郷土教育と深く係わって活用されていたのであろう。先の序の著者・中村忠充は「愛知県史蹟名勝天然紀念物調査会長」であると同時に「愛知県学務部長書記官」とあり、「学務」行政の中心人物だと知られる。

さて、昭和初期に愛知県下で郷土研究を試みた一人に市橋鐸(本名、鐸磨。一八九三〜一九八三)を挙げられる。市橋についてはこれまでも『口承文芸研究』誌上に二回程取り上げた。とりわけ市橋は、昭和二年から一六年まで旧制小牧中学校で国漢科教員を務めつつ郷土研究を進めていった。市橋の自伝によると、元来、郷土教育は地歴科教員が行なうはずののだが、市橋は小牧中学校に出来た郷土室を我が物顔に利用して、夏期休暇などの宿題に郷土関係の調査をしたものを提出させて自分の好きな郷土研究を行なったという。また、旧制小牧中学校の生徒会雑誌『曳馬』を、生徒に提出した宿題の発表の場所としたという。そういつた中で、編輯兼発行人・市橋鐸磨、発行所・小牧中学校郷土室の写真集が何冊かあるのは、先に紹介した『愛知県史蹟名勝天然紀念物』との関係から注目される。今、手許にあるものを紹介すると、

- ① 『尾北郷土資料写真集』(昭和六年一二月、全五〇葉)
- ② 『続尾北郷土資料写真集』(昭和七年一二月、全一六葉)
- ③ 『続々尾北郷土資料写真集』(昭和八年一二月、全三四葉)
- ④ 『尾張郷土資料写真集』(昭和一〇年一二月、全一九葉)
- ⑤ 『尾張郷土資料写真集——昭和十一年度版——』(昭和十一年一二月、全一六葉)
- ⑥ 『尾張徳川侯行列之図 尾張郷土資料写真集(昭和十二年度版)』(昭和十二年一二月、全一〇葉)

⑦『尾北名勝風俗図譜 尾張郷土資料写真集（昭和十三年  
度版）』（昭和十三年二月、全一〇葉）

藤一郎  
撮影

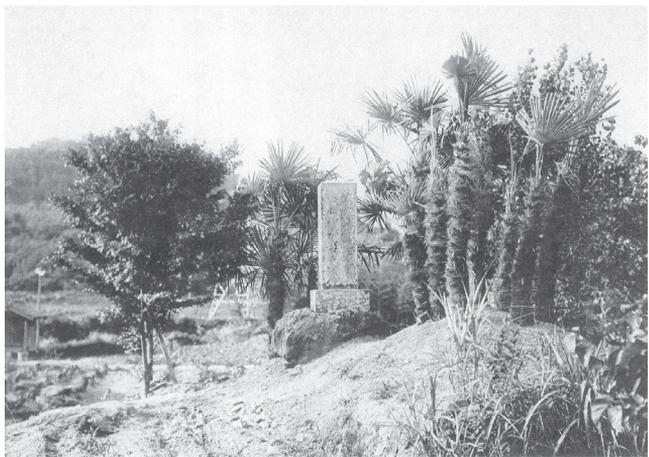
これらはいずれも、非売品で三〇〇部から四〇〇部程度が印刷されたものである（⑦のみ印刷部数が記されていない）。全てA5判の紙の中央の葉書大のスペースに写真が印刷されている。一枚に写真一つが印刷されている場合もあれば、複数のが印刷されている場合もある。その写真の紙に、それぞれ一枚ごとに薄紙が一つの縁にだけ糊付けされており、写真を覆って保護している。半透明で写真がうっすらと見える。その薄紙に、写真の通し番号と題名と簡単な解説とが附されている。それぞれの紙は独立しており、綴じられていない。ボール紙の箱に仕舞われる形になっている。

伝説関連のものを一、二、紹介しよう。たとえば、①の通し番号四〇の写真〔写真1〕は、

四〇、芋塚

古木津用水土手橋の畦三足がくれの旧蹟にある翁塚で「芋洗ふ女西行ならば歌詠ん」の句が刻されてある。寛政四年の再建である。建設の由来は、附近に西行法師の遺蹟あるにちなんだので、芭蕉には縁はない。当時この地方きつての宗匠だった臥雲を盟主とする飛車屈一派の肝入で出来たものである。黙我の続小田塚にも記されてある。（伊

と説明されている。写真を見る  
と、中央に石碑が建っており、そこにおそらく「芋洗ふ」の句が刻まれている（小さくてよく判らないが）。碑の右が小高



〔写真1〕芋塚

い塚になっていようであり、芭蕉が七本植えられている。石碑のやや左奥に鉄塔が建っているのが判り、左端に小さなお堂が建っている（以前、名古屋経済大学図書館で当写真集の展示をしたときに小牧市在住の大学院生がこの写真を見て、これは私の家の近くだと教えてくれた。現在は周囲も随分変わってしまったという）。写真は一葉に一つだけ印刷されている。

次に、これも①の通し番号四九の写真〔写真2〕は、

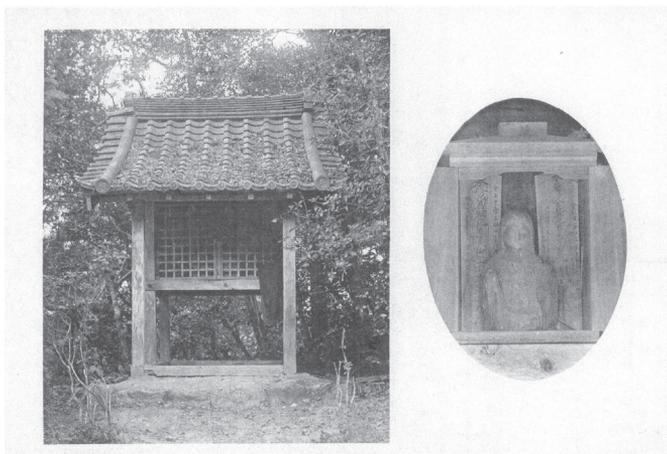
#### 四九、八百比丘尼

東春日井郡高蔵寺村の地が未だ海岸だった程古い昔、日本伝説界の大立者八百比丘尼がこの地に誕生したといふ。現在同村白山シラヤマに御堂があつて比丘尼の像が安置されてゐる、本図はそれである。同村の言ひ伝へでは若狭に没すといつてゐる。「白山の八百比丘尼」とは民俗学上暗示に富んだ言葉ではあるまいか。興味上よりこれを加へること、した。八百比丘尼の正体については中山太郎氏の巫女史に據られたい。

と説明されている。写真は一葉に二つ印刷されていて、一つ（右）は八百比丘尼像の写真であり、楕円の形の写真の中央に目鼻だけがはっきりとしない、石膏の角が取れて目鼻が消えてしまった古い西洋のマリア像のような上半身像が写っている。木像かと思われる。木造の神棚のような棚の中に置かれている（扉はない）。像の置かれている棚の中の左右に何か書かれている木札が二枚立て掛けられている。左の札には札の右隅に小さな文字で「今上皇帝玉体安全祈念」と書かれてあり、中央に大きい文字で「本脩八百比丘尼尊天御宝」以下、像の右肩の後ろに隠れてしまい、判読不明である。おそらく一番左には年号や奉納し

た者の名などがなるのだろうけれども、はっきりとは読み取られない。左側は判読が苦しい。もう一つ（左）は、八百比丘尼像が安置されている「御堂」の写真である。小さな堂で、人が上がることはできない、外から拝むだけの堂だと判る。これら写真の説明は、ほとんどが市橋鐸に拠ると思われる。

それはさて、①四〇の撮影者・伊藤一郎について未だ詳細を知らない。①全五〇葉の内、伊藤一郎撮影と紹介されるのは



〔写真2〕八百比丘尼

二三葉にも及ぶ。他には木村俊逸撮影とあるのが五葉、今枝泰治撮影とあるのが一葉。これらが個人名による撮影者である。他には中島写真館と小川写真館との撮影がそれぞれ五葉ずつある。それ以外は①四九の例のように撮影者を紹介していない(一葉に写真が一枚とは限らず、一葉の中に写真が二つ、三つと印刷されている場合もあり、複数の撮影者名が記されたものもある)。とまれ、個人名と写真館名とが併存している、つまり分けて捉えられているらしいことが判るので、個人名で紹介されている写真はおそらく写真館など商業的な撮影ではなく、昭和初期に写真機カメラを操っていたアマチュア・カメラマンの撮影だということになるのではなからうか(①以降の写真集についても、事情は同じい)。

もしそうだとするならば、昭和六年現在、愛知県東春日井郡小牧町の小牧中学校の教員、市橋鐸の周囲に、写真機を扱える者が複数存在したということである。そうして、市橋は積極的に新しいメディアである写真を郷土研究に活用しようとしたということである。この辺の事情を市橋本人は、意外と(市橋は自称「紙魚の生まれ変わり」。書籍の蒐集のみならず、じしんが書いた書物——ほとんどが自費刊行——も数多を保存しており、また、自伝も幾通りか試みている)記してくれていない。類推に頼るしかないが、市橋鐸が上記の郷土写真集を世に送りだした背景には、写真機の普及、写真技術の普及が大きく作用したのだろう。それと同時に、昭和初期の郷土研究が、たと

えば『愛知県史蹟名勝天然紀念物』から窺えるように、「博覧会」などの形で具体的に目に示されるような、視覚的のもの、有形のものへの偏重があったらしいことも押さえておきたい。市橋鐸は、昭和二年五月に名古屋市の松阪屋での展覧会に出掛けた。同年一月に非売品の写真帖を入手したか。少なくとも、新聞報道などで知ってはいたのだろう、と想像している。

## 二、市橋鐸の内藤丈艸研究

市橋鐸にとってこの時期(昭和初期)の代表的な著作は、何といつても『俳人丈艸』(昭和五年五月、白帝書房刊、売価二円五〇銭)だった。四六判三五七頁のコンパクトな体裁ながら厚みのある書である。書名と著者名と印刷された白い紙が表と背に張られたボール紙そのままの色の簡素な函に納まっている。装訂は木曾川を想わせる青鈍地に犬山名物でもある紅葉を控えめに散らし、背に金字で「俳人丈艸 市橋鐸著」とだけ刻された、あつさりとしたものだ。白帝書房は、住所は「東京市牛込区早稲田鶴巻町」だが、犬山城の別名を白帝城という。愛知県犬山市には、今も「白帝」を冠した会社などがあるから、ひよっとすると犬山縁の経営なのかもしれない(『俳人丈艸』の「はしがき」に、市橋は「かつては、書房主も丈艸研究に力を尽したこともあつた」と記している。本書刊行時既に市橋鐸はここから『俳句新釈』『川柳新釈』も出していた)。「俳人丈艸」は、

市橋鐸と柳田國男との関係を考えるときに外すことの出来ない書であった。それというのも、市橋が柳田に本書を送ったことと、柳田から市橋宛に礼の葉書が送られてきたことが判るからである。市橋の書物からの孫引きになるけれども、柳田國男からの葉書の文面は、

永々御骨折の俳人丈艸御恵与拜受仕候。なつかしく拝見いたしをり候、小生始めてのことのみにて評も出来不申候。誰か紹介するよう社の者へ話可申候。

という次第である（市橋鐸は雑誌『郷土研究』創刊号以来の愛読者であったし、投稿が掲載されたこともあったからから、柳田國男との接点は既に存していた）。

さて、『俳人丈艸』の構成は、「丈艸年譜」「口絵の解説」「口絵」が冒頭に置かれ、序編として「序編 俳諧揺籃の地としての尾張」が置かれ、続いて丈艸の経歴に沿っての本編が連なっている。内藤丈艸の人物伝の体裁である。本編では、内藤丈艸の人生を「第一編 犬山時代」（一歳から二九歳まで）「第二編 放浪時代」（二九歳から三三歳まで）「第三編 無名庵時代」（三三歳から三五歳まで）「第四編 仏幻庵時代」（三五歳から没する四三歳まで）に区分している。そうして、本書の後半は、「第五編 丈艸の為人」「第六編 俳諧観」「第七編 終焉とその後」「附編」「補遺」となっている。

『俳人丈艸』を読むと、これが今日一般に考えられている研究書とは、趣がちよつと異なるように感じられる。たとえば、冒頭の「はしがき」は、

それはまだ私が母のふところに抱かれてゐた頃のことであつた。母はよく寝物語に丈艸の名を聞かせてくれた。その生涯のすべてを犬山に暮した母には、犬山におけるたつた一人の偉人、内藤丈艸の名はなつかしいもの、一つなのであつたであらう。ちひさい訳のわからぬ年頃の私にまでそれを話さずにはゐられなかつたのであつた。貧しけれども、私の丈艸研究の種はそこに播かれたのであつた。

と書き始められている。「趣がちよつと異なる」というのは、この「はしがき」からも窺えるように、市橋鐸の研究が自らが丈艸伝承、丈艸伝説を受けてきた環境と連なつて進められているところである。また、丈艸の人生をまるで小説のように描いていく。これらは、本書のそここに確認できる（丈艸以外の人物についても同様）。たとえば、第一編「犬山時代」は「少年時代」「青年時代」「遁世」と分かたれているが、「少年時代」の冒頭は、次のように書き始められている。

私は丈艸の郷里、尾張の犬山に生れた。その字新道の瓦坂上に坂尾さんといふ新聞取次店があつた。少年時代の

私達はその表でよく遊んだ。表の路は坂尾さんの家のすぐ前から坂になつてゐた。そのずつとさきに木曾川が見える。向側は島である。そこに井戸が一つあつて、その傍には大きな木蓮の樹があつた。井戸のまはりにはごろ／＼石が投つてあつた。この島こそ蕉門四哲の一人、内藤丈艸の宅址なのである。／＼(中略)／今ではその頃の様子はずもとより、私達は子供の頃の面影さへも日に月に恐しい程に變つてゆく。木戸がこぼたれたり、蓮池が郷瀬川と名乗つて悪水路となつたのは、明治の初年のこと、きいてゐるが、あの家の前のならだら坂、それは後になつて瓦坂と名付けられたが、これも幾度かの改修の結果、元の姿はなくなつてしまつた。丈艸が若い頃朝な夕なに眺めたと思はれるあの内田田浦は、埋め立てられて大遊園地と化して、そこには旅館だの、西洋料理店などが建築され、さらにめだかに興じたり、しゞみ貝を捕つたりしたあたりには、県道が通じ、電車が開けて、木曾川の大鉄橋を越して美濃路へ入つてゐる。／＼こんな風ゆゑに、今の宅址の有様は、ありし昔を追憶するにはあまりにかけ離れすぎてゐる。それに何等のめじるしもない。里人のすべては無関心である。丈艸の生れた家の所在地はこゝであるけれども、後になつて移転せられたので、維新前は木俣氏の住地になつてゐた。／＼この内藤氏の宅址と伝へられるのが三ヶ所ある。内田御門の辺といふのと、字大本町といふのと、西谷だといふのとである。

ややく長く引いた。簡単にいうと、丈艸の生家と伝えられるのが、犬山町内に四箇所あることの説明である。本文ではその後、内田御門、字大本町、西谷が否定されて字新道瓦坂上が正しいと考証されていくのだが、これなどは小野小町や武蔵坊弁慶の生誕地伝説と同様に、丈艸にも生誕地伝説が発達していたことを示している(講演の途中でフロアーの伊藤龍平から、現在も丈艸産湯の井戸が二箇所存しているとの教示もあった)。

市橋鐸の文章は、今日の文学研究の手つきというよりは、伝説研究の手つきを想起させる。あるいは、それというよりも、子供時代の自分や調べて歩く自分や自分に話を伝えてくれる人々のようすなどを織り込みながら、「内藤丈艸」の歴史に分け入ろうとする姿勢がありありと感じさせる。これは、かつて、私に「口承文学紀行」と名づけた書き方そのものであろう。(「解説」(白田甚五郎『口承文学大観』一九九七年、おうふう刊))

以前、ある近世文学研究の研究者が、さも困惑したかのような口吻で、「市橋(鐸)さんのロンブンはなあ……」と漏らしていたことを思い出す。今日の論文とは、それも文学研究のそれとは手つきが確かに異なっているのだが、市橋鐸の内藤丈艸研究は民俗学や口承文学からアプローチする可能性を示してくれているのだと、私の立場から積極的に迎えにいきたい。そう思って、『俳人丈艸』を読み進めると、本書が丈艸「伝承」研究の佳い手引き書にさえ見えてくる。先の生家が四箇所伝わつ

ている伝説に加えて、幼くして「俳句して笑はれにけり今日の月」の句を詠んだ「逸話が人口に膾炙してゐる」ことや、母を失い継母が嫁してき、「世俗はこゝにも、みにくいまゝ、子いぢめ的一幕を伝へてゐる」ことなどなど、多くの伝承を紹介しつつ、市橋はその史実を明らかにしようとしていて、それに学ばされることも多いのも確かだけれども、これらの伝承に言及しているそのことこそが、私にとって、先ず有り難く、興味深い。

### 三、「俳人丈艸」「口絵の解説」

——そうして、林輝夫のこと

そのような内藤丈艸に纏わる伝承を見ていく中で、市橋鐸は丈艸にまつわる画像類についても、若干の考察を試みていた。それが『俳人丈艸』の冒頭に配された「口絵解説」である。そこには都合六葉の口絵（全て写真）がそれぞれ薄い紙に保護される形で印刷されていた。「一 丈艸の陶像」「二 丈艸の墓及び 経塚」「三 丈艸の筆跡 その一 庚申の旅の記」「四 筆跡 その二 北枝宛消息（己之中集所蔵）」「五 筆跡 その三 俳句と漢詩」「六 「幻の庵」の表紙」の六葉である（二には写真が二つ印刷されているので、写真は都合七つ）。当時の文学研究書一般を調べたのではないので、はっきりと断言できないけれども、本書はおそらく写真を有効に紹介し活用している点の特徴といえるのではなからうか。そうしてこれらの写真

の紹介・活用は、先に紹介した小牧中学校郷土室から刊行された郷土写真集と接続して考えられる。市橋は積極的に写真を利用しようとしていた。

そのような中で、ここでは「一 丈艸の陶像」に注目したい。それというのも、人物像、肖像は、そこに形作られる人物に与えられた制作者始め人々のイメージを具現化したものであり、特にその人物を目前にしてなるべく客観して形作るのとは異なる場合、たとえばその人物の死後しばらく経ってから形作られる場合には、時間の経過と共に新たに付け加えられたイメージ（それは人々によって語り継がれ聴き継がれてきた場合には伝承や伝説という呼び方を与えることができるだろう）が、人物像、肖像の中に刻み込まれるということになる（そもそも、その人物が死んでから時間が経過しても人物像、肖像を作るということは、その人物が十分に伝説上の人物だということを物語っている）。つまり、このような人物像、肖像は、それ自体が伝承研究や伝説研究の対象として十分な条件を備えている（このような人物像、肖像の特色を逆手にとって、権力者やその周囲が己を伝承化、伝説化して英雄、偉人として語られるようにと利用することも、また、よくあることだ）。

さて、内藤丈艸の場合は、どうだろう。市橋鐸の「一 丈艸の陶像」写真の「口絵解説」を読むと、

東京小石川関口の芭蕉庵（正しくは龍隠庵）中に安置され



〔写真3〕内藤丈艸の陶像

てゐるものである。堂には芭蕉翁を中央にして、右には嵐雪、左に去来、丈草の三像が置かれてゐる。(其角のはない)。背面には、野良庵所藏湖南芭蕉翁墳下土以丈艸子像制寄附、施主五龍峯発雲舎と併記し、一瓶造之と刻し一瓶の印

影がある。製作年代は別に記してないが、嵐雪のに文久戊午六月造とあるから恐らくその頃の作であらうとは現庵主伊藤松宇先生の言である。この庵は「昔上水開発の頃芭蕉此地に遊ばれしにより後世其旧跡を失はん事を歎き、白兔園宗瑞及び馬光などいへる俳師、此地の光景、江州瀬田の義仲寺に髣髴たるをもて」こゝに塚を築き、さらに庵を建てたところで、この由緒ある處に丈艸の像のあるのをうれしく思ふ。像は例の卅六歌僊などの画像からヒントを得たものらしく、さまで古いものではないが、あまり世上に

に厚う御礼を申し上げる。

とある〔写真3〕。

知られてゐないし、唯一の像でもあるので巻頭に載せること、した。それに就いては松宇翁をわづらはしたことおびたゞしい。この機会

丈艸像制作年にヒントを与えるとされる嵐雪像の制作年の文久戊午は、文久二(一八六二)年。内藤丈艸は、寛文二(一六六二)年生まれで元禄一七(一七〇四)年没だから、もし嵐雪像と同じ年に制作されたと仮定すると、死後一五八年が経過してから制作された陶製の座像だということになる。丈艸という人物が伝説上の人物となるのに充分な年月の蓄積があつた。したがって、ここに見る丈艸像は、丈艸という人ではなく、伝説を示している。これについて、市橋鐸もまた理解している。したがって、「像は例の卅六歌僊などの画像からヒントを得たものらしく」と記すわけだ。三十六歌仙という歌人の人物像に準えて人物像が形作られているというのだ。譬えていうならば、これは、肖像という「話型」なのである。三十六歌仙での僧形といえは僧正遍照ということになる。そのような人物のイメージすなわち伝説と結びつきながら、話型に譬えていえば「僧正遍照」譚の一類型として丈艸譚が位置づけられるということだ。

ここで注意したいのは、市橋が「唯一の像でもある」と述べていることだ。つまり、市橋鐸の言に従うならば、昭和五年段階では、内藤丈艸の肖像はこれ以外に知られていなかったというのだ。

ところで、私が愛知県犬山市の大学に来てまもなく、市橋鐸の生徒だった林輝夫という人と出会うことになった。林は犬山市の旧市街中心から少し南に行った橋爪に住まっていたが、旧制小牧中学校時代に市橋に教わり、市橋と同じく國學院大学の国文科に進んだという。大学は、時代が悪く、学徒出陣のために満足に授業を受けられなかったという（民俗学者の井之口章次や国文学者・歌人の岡野弘彦らと同世代になる）。敗戦しての復員後、大学を終えて郷里に戻り、高等学校の教員の傍ら、市橋鐸と同じように郷土研究に携わった。実は、市橋鐸は晩年に蔵書を処分することになり、林は相談を受けて文学研究関係は、市橋が最終的に勤務した現愛知県立大学（市橋在職中は女子大学）図書館に寄贈し、郷土研究関係は林が引き取った。その後、林も高等学校退職後体調を崩して、結局、郷土研究関係の多くを私が勤務する犬山市の名古屋経済大学図書館に寄贈することになった。右のいきさつにより、私は林を知り、市橋鐸についての聴き書きをするために何回か林宅に通うことになった。

林は体調が優れず、外出もままならないようだったが、そのような林が私に頼んだことがあった。それは、まもなく、内藤丈艸の没後三〇〇年を迎えるのだが、二五〇年の時には町を挙げて盛大な催しをしたが、せっかく犬山市に大学ができたのだから、今回はそこで何か企画ができないだろうかというもの

だった。そこで、私の所属する名古屋経済大学人文科学研究会が主催者となり、平成一五（二〇〇三）年一月に「内藤丈艸没後三〇〇年記念シンポジウム・講演会」が開かれることになった。その概要を私が学内誌に紹介した当時の短文を、ここに再録しておく。

「大山出身の内藤丈艸（ないとう・じょうそう。一六六二—一七〇四）は松尾芭蕉門下の俳人として名高く、蕉門の十哲（あるいは四哲）のひとりに数まえられる。芥川龍之介の『枯野抄』においても重要な人物として登場する。二〇〇三年が丈艸没後三〇〇年であることを記念して、ここにシンポジウムと講演会を企画した。犬山市にキャンパスを置く本学に相応しい催事であることを目指した。すなわち、パネリストも講師も学外から新進気鋭の研究者を迎えて、実質的な学術発表を行うことと一般市民の理解会得できる興味を惹くことの二点を目標とした。／（中略）／内容は、シンポジウムがイメージとしての丈艸、いわば丈艸伝承についての分析ということになった。『司会の高木「史人」は、丈艸の絵や像の姿が謹厳な修行僧、飄逸な世捨て人、穏やかで落ち着いた宗匠という三つの累計になることから、丈艸のイメージが分裂していることを指摘した。『シンポジウム「内藤丈艸とその周辺」のパネリスト』伊藤「龍平」氏は、近世俳諧説話の中でも丈艸のそれは少ないことを指摘して、俳人というよりも隠者としての丈艸には説話伝承圏が希薄だったことを論じた。『同じくパネリストの「篠崎「美生子」氏は、

近代の小説に登場する丈艸が、親や宗匠のために自己を抑制する人物として描かれており、それが近代社会のサラリーマンたちの支持を得たと述べた。／講演「西鶴・芭蕉・丈艸」の塩村「耕」氏は、井原西鶴、松尾芭蕉、内藤丈艸の三人を比較して、それぞれに隠者になりたいという意志はあったが、市井において艶（やさ）隠者になった西鶴、俳諧の宗匠として俳隠者になった芭蕉に対して、丈艸こそは真の隠者（真隠者）であったと述べた。（後略）（※「内は今回、新たに補った」（『センター通信』第11号、二〇〇四年、名古屋経済大学学術研究センター）

もう少し補っておくと、シンポジウム・講演会のメンバーには、当日、落ち合ったのだが、期せずして話は内藤丈艸に纏わる伝承は乏しいという方向に収斂した。特に、伊藤、塩村についてはその傾向が強かった。伊藤龍平は、宝井其角の俳徳説話が多いのに比して、丈艸には少なく、その原因を「隠者」に求めた。塩村耕は丈艸を隠者の中の隠者（真隠者）として説明した。隠者は名利を求めず、俗世に交わらないのだから、伝説を生む人々との接点がないとみただけである。私も、肖像のイメージが一つに定まらない原因を隠者に求めようとした点で、伊藤、塩村説と軌を一にした。一人、近代文学研究の篠崎美生子は、芥川龍之介「枯野抄」、中山義秀「芭蕉庵桃青」、童門冬二「小説 内藤丈草」などを題材にして、サラリーマンとしての丈艸像（＝伝説）が近代において生成し読者の支持を得たことを報告して、会場の注目を集めていた。

実は、このシンポジウムに先立って何度か林輝夫のもとに通ったときに、林は私に市橋鐸が蔵していた内藤丈艸の木像を始め、数点かの内藤丈艸の肖像の写真を貸し与えられた。私の丈艸の肖像についての資料は、師・市橋鐸が先鞭をつけ、弟・林輝夫が引き継いだ仕事に基づいていた。ただし、先に引用した短文で私の発表をも簡単に報告しているが、私は司会として加わったのみで発表の時間は与えられておらず、一応、資料は持たせられども、発表時間はなかった（先の短文で私の概要を紹介したのは、発表できなかった無念を晴らすためだったともいえる）。幸いなことに、シンポジウムのパネリストの伊藤龍平、篠崎美生子、そうして講演者の塩村耕の話題がまことに素敵で、的確で、司会の付け入る隙など、とてもなかった。したがって、本稿に改めて丈艸の肖像を紹介し、肖像と伝説との関係を論じる意義も存すると考えたい。

なお、林輝夫は、この三年後に帰らぬ人となった。

#### 四、肖像と伝説

とまれ、林輝夫から手渡された資料は、以下の通りである。

①内藤丈艸の陶像（これは『俳人丈艸』に収められたのと同じ）

②内藤丈艸の木像（愛知県丹羽郡犬山町新道 坂尾氏蔵）

- ③内藤丈艸の肖像画（伝蕪村筆『俳諧三十六歌巻』）  
 ④同上（大津・義仲寺蔵）  
 ⑤同上（大津・義仲寺蔵）  
 ⑥内藤丈艸の掛軸（裏に「呈市橋鐸先生」とある）  
 ⑦丈艸通世して去る図（『尾張名所図会』から模写したものの『犬山の山河が生んだ俳人丈草』昭和二八（一九五三年第一版刊の表紙、犬山史蹟保存会・犬山町教育委員会。）  
 ⑧内藤丈艸木像（五世尾関作十郎作、犬山城並びに瑞泉寺蔵）  
 ⑨同上（市橋鐸旧蔵）  
 ⑩内藤丈艸の肖像画（犬山・寂光院蔵）

誌面の都合で全ての写真を載せるわけにはいかない。簡単な解説をして大きく三系統に分類できると考えるので、それぞれから一つずつだけ掲載しよう。

- まず、①②③は市橋鐸編『丈艸聚影 第一輯』（昭和六（一九三一）年 俳諧史研究会刊）に掲載のもの。『俳人丈艸』の刊行が一つのきっかけになって、肖像が集まりだしたということのようである。それ以外は、林輝夫の蒐集にかかる。先に引用した短文に述べたように、丈艸のイメージは、「A、謹厳な修行僧」「B、飄逸な世捨て人」「C、穏やかで落ち着いた宗匠」という三つのイメージに分散する。先に紹介した写真3つまり①のものはAに当たろう。Aは僧衣に袈裟をつけて端然として

いる。①④がこれに当たろう。ただし、③も袈裟をつけてはならず表情もやや寛いだ感はあるものの姿勢はこれに準じているので、これもAに入れておこう。

一方Bは⑤、⑩がこれに当たる（⑩は、講演当日、林輝夫が『わたしの文学紀行 四十一号線を歩く』（一九八七年、尾張文化研究会刊）に紹介していた瑞泉寺蔵の丈艸真筆とされる戯画と混同してしまったので、ここに訂正しておく。寂光院蔵である。構図としては真筆とされる戯画の影響を受けて描かれているように思われる。すなわち、⑩には禅画の趣がある）。ここでは⑩の写真を掲げる〔写真4〕。

そうして、残る②⑥⑦⑧⑨がCである。宗匠頭巾を被っているのがこれら全てに共通している。ここでは、かつて市橋鐸が所蔵し、林輝夫の手に渡った⑨の写真を紹介しておく〔写真5〕。私が撮影したものだけでも、見たところとても新しく、昭和の作だと思う（なお②の所蔵者の坂尾氏は、『俳人丈艸』の本編冒頭に紹介された内藤丈艸生家に伝えられる木像で古そうなものであるが、痛みが激しく、特に首がぐらついて不十分に修繕してあるために、顔が変に上向いていて、穏やかというよりもむしろユーモラスに見えてしまうので、誤解を避けるためにここでは写真を載せなかった）。

以上、見てきたように、内藤丈艸の肖像から、一つのイメージに収斂させることはできなかった。昭和五年に、市橋鐸は「里人のすべては無関心である」と述べていた。ここに誇張はもち



[写真 4]



[写真 5]

憶と記録とが、今も犬山に残っていることから判る。だけれども、人物像が一つに収斂しない弱さが、丈艸伝承、丈艸伝説を犬山でも影の薄いものに行っているように思われる。平成一五(二〇〇三)年の催しは、名古屋経済大学人文科学研究会が行なったものの他に、もう一つ市民団体が元東京大学総長で文部

ろん、ある。市橋鐸の母の鈴木鎮女しずめ始め、丈艸に関心を抱く人々は、むしろ多かつたと思われる。それはたとえ、時代は下るけれども、昭和二八(一九五三)年の丈艸没後二五〇年記念行事が賑やかに行なわれた記大臣も務めた物理学者・俳人の有馬朗人の講演会を企画したけれども、これらの催しに若い人や地域の商店などを幅広く巻き込む力はもはやなかったように見受けられた。昭和二八年のときには、幼稚園を会場にして丈艸を主人公にした芝居が演じられ、そのパンフレットには地元の商店が多く広告を出すなど、活動にはまだ力強い広がりがあった。仮りに、これからテレビでドラマ化されるなどの動きがあれば、また、新しい丈艸伝説が蠢動することもあろうけれども、それはそれ。結論は、やはり、かつて平成一五年に伊藤龍平、塩村耕らが出したのと軌を一にするところに落着するのかな、と考えている。

附記

本稿は、二〇一二年六月二日に犬山市本町通りに面した犬山市福祉会館における講演の資料を元にして、新たに書きおろしたものである。会場は、市橋鐸の生家の二軒程北隣りにあり、会場の窓から市橋鐸の生家(犬山藩御典医、鈴木玄道家)の瓦屋根が見下ろせる。一度、ここで市橋鐸に纏わる話をしてみたかった。当日は意を尽くすことができずに、聴衆に申し訳なかつた。当日いらした方々にお礼とお詫びとを申し上げる。また、本文中敬称は省略したことをお断りする。

なお、本稿は、平成二四年度科学研究費(基盤研究(C))課題番号 24520927 の研究成果の一部である。

(たかぎ・ふみと) / 名古屋経済大学